

IMAGE ARTS AND SCIENCES

日本映像学会報 No. 188, 2020

TOPIC トピック

佐藤忠男先生の文化功労者顕彰を祝して／石坂 健治…2

MEMORIAL 追悼

遠藤賢治氏を悼む／豊原 正智…3

INFORMATION 学会組織活動報告

機関誌編集委員会…4 ヴィデオアート研究会…4-5

アナログメディア研究会…5-9 ショートフィルム研究会…9-10

ドキュメンタリードラマ研究会…11 メディアアート研究会…12

アジア映画研究会…13 中部支部…13-14 西部支部…15

FROM THE EDITORS

編集後記…16

「Image Arts and Sciences / 日本映像学会報第 188 号」2020 年 5 月 15 日発行
 発行人：武田潔 編集担当／総務委員会（委員長 西村安弘・副委員長 橋本英治）
 日本映像学会事務局：176-8525 練馬区旭丘 2-42-1 日本大学芸術学部映画学科内
 phone：03-5995-8287 / fax：03-5995-8229 / e-mail：office@jasias.jp
<http://jasias.jp/>



日本映像学会

佐藤忠男先生の文化功労者顕彰を祝して

石坂 健治

佐藤忠男先生、2019年度の文化功労者顕彰おめでとうございます。映画研究を志す後輩の一人として、また同じ大学に籍を置く者として、心よりお祝い申し上げます。

言うまでもなく先生は日本映像学会の創立メンバーであり、長年にわたって日本映画史研究をお仕事の中心に据えて150冊に達する著作を発表されるとともに、日本映画の海外への紹介や外国映画（とりわけ非欧米圏の映画）の日本への紹介、つまり映画を通じた国際交流にも精力的に取り組まれ、そのうえ教育者として多くの創作者や研究者、批評家を育てられた、その活動のボリュームと多彩さにはめまいを覚えるほどです。ここでは間近で垣間見ることができた先生の姿から学んだことを振り返ってみたいと思います。

個人的に最も頻繁に同行・同席させていただいたのは、アジア映画に関する調査や交渉の現場です。すでに先生は1970年代から国際交流基金などの依頼でアジアを回る旅を何度もされていました。文化大革命が終わった直後の北京と上海、イメルダ・マルコスが開催したマニラの映画祭を訪れたエピソードなどを興味深く伺いましたが、その頃の旅の主目的は概ね日本映画の紹介で、しかしながら旅の途中で目にした相手国の映画に魅せられてしまったとのこと。91年にアジアフォーカス・福岡国際映画祭の初代ディレクターに就任されてからはまさに東奔西走の日々でした。現在のように応募作がデータで簡単に送信されてくると違い、英語の堪能な久子夫人をコーディネーターとして一緒に、毎月のようにアジア各地に出向いては試写を組んでもらうという気の遠くなるような作業を、任を退かれるまでの16年間ずっと続けておられました。いちどアジア映画の発掘に対する情熱の在り処をお聞きしたら、「かつて軍国少年だった贖罪意識のせいでアジアを応援してしまう。だから私がアジア映画に付ける点数は少し甘めかもしれません」と笑っておられたのを憶えています。

先生はとりわけ小さな国の映画を輝かせる名人です。インドの陰に隠れがちなスリランカや旧東側のベトナムやモンゴルにも多くの秀作が眠っているという確信のもと、福岡で開催したこれら各国の特集は、その後も世界各地からのリクエストに応じてパッケージごとと巡回され、とりわけ本国から感謝されました。「小国の映画が紹介されにくいのは、質が劣っているからではない。単に大国より発信力が弱いだけ。だから応援するのだ」というのが口癖でした。これは私も肝に銘じていることです。

むしろ中国や台湾、韓国の映画人との付き合いでは先生は草分けであり第一人者です。日本映画大学にやってくる東アジアの留学生の大半は、先生の著作の翻訳を通じて日本映画史に初めて接したと言っていますし、最近では、多くの識者が先生の数多の著作の中でも五指に入ると評する『キネマと砲聲 日中映画前史』（キネマポート、1985年／のち岩波現代文庫、2004年）が2016年に『炮声中的电影：中日電影前史』（岳遠坤訳、后浪出版公司）として北京で翻訳・出版され、中国語圏で新たな読者を獲得して大きな話題になっています。

韓国の映画人との絆の深さも印象的です。『韓国映画の精神 林権澤とその時代』（岩波書店、2000年）は巨匠・林権澤（イム・グォンテク）監督との長年の交流の軌跡ともいえる名著ですが、映画史上に忘れられていた怪物的監督、金綺泳（キム・ギヨン）の日本への紹介に尽力されたことも忘れられません。その代表作『下女』（1960年）は、いまを時めく『パラサイト 半地下の家族』（2019年）の奉俊昊（ボン・ジュノ）監督が大きな影響を受けたと語ったおかげで脚光を浴びていますが、

90年代に当時の私の職場（国際交流基金アジアセンター）が上映を企画したとき、戦時中に京都の大学に留学していた監督は、当時受けた差別が忘れられず、自分の代表作である『下女』だけは日本人に見せたくない、と見事な筆づかいの日本語の手紙で通知してきました。私はただちに先生に相談し、先生と奥様を含むチームで何度も監督と話し合い、説得を重ねた末に『下女』の日本上映は実現しました。アジアの映画人がいまなお背負っている日本に対する複雑な思いと、それに真摯に向き合って相手の話にとことん耳を傾ける先生の姿から本当に多くのことを学びました。

もうひとつ言い添えさせてください。教育の現場、すなわち日本映画大学で卒業制作をはじめとする学生作品の発表会があると、先生はずっと皆勤賞を続けておられます。「大半」ではなく文字通り「全て」を観る。観てただちに的確に講評する。頭が下がります。学生作品のどこが面白いのですか、とお聞きすると、涼しい顔で「未熟な者にしか撮れない面白さがどの作品にもあるのです」とのお答え。これには参りました。ダメ出しばかりしている私は果たして先生の境地にたどり着けるのか。甚だ自信がありません。

最近お目にかかった折には、これまでアジア・アフリカを回った映画旅日記のような本を構想していると伺いました。ぜひ読みたいです。おからだを大切に、ますますのご活躍を！



佐藤忠男先生（前列中央）を囲んで：
日本映画大学教員・学生とともに（2018年6月）

（いしざかけんじ／日本映画大学）

遠藤賢治氏を悼む

豊原 正智

大阪芸術大学教授で前副会長の遠藤賢治氏が、本年2月9日脳梗塞のため逝去された。66歳であった。あまりにも突然のことで連絡ももらった時は、どこの遠藤さんかと一瞬戸惑った。謹んでご冥福をお祈り申し上げる。

当日は、大学のオープンキャンパスで、彼もキャラクター造形学科の教員として朝から出勤していた。寒い日であった。ご夫人のお話によれば、滋賀県栗東市のご自宅の前は雪が積もっていたそうで、坂道のため雪かきをして車を出されたそうである。奥様も芸大に勤務する教員であるが、その日は特に大学に出なければならぬことはなかったそうである。たまたまいつものように賢治氏が運転する車で大学に向かわれた。車中、全くいつもと変わらず奥様と会話を交わしながら出勤された。同じ会場の別々のブースでお二人はオープンキャンパスの業務をしておられたが、突然、賢治氏が倒れられた。駆けつけられた奥様が声をかけられ、それに微かな反応があったそうである。そしてそのまま意識を無くされ亡くなった。仲の良かったご夫妻ゆえに何かの力が奥様と一緒に芸大に向かわせ、最期の瞬間に付き添わせたのではないかと思います。はいられない。

遠藤さんは、依田義賢の教え子であり、秘蔵っ子であった。「仏の遠藤」と思えるほど、優しく礼儀正しく、気配りのきく人であった。キャンパスで会うと遠くから必ず手を挙げ、ニコニコしながら少し体を左右に揺らしながらやってきて、お互い挨拶を交わし、特に学会のことでしばらく立ち話をしたものである。そのような性格の遠藤さんは、依田さんにとってとても使いがってのある「遠ちゃん」であった。依田義賢を中心に1977年夏から開催されてきた「夏期映画ゼミナール」に対する思いは並々ならぬものがあった。長らく学会の理事を務め、先年亡くなった吉岡敏夫とともに下働きに奔走していたのが印象的であった。

依田、吉岡亡き後、毎年、テーマや上映作品について、遠藤さんと一緒に京都文化博物館の森脇清隆氏との打ち合わせに行った。京都京北町での二泊三日の夏のゼミナールが、各大学の事情で、参加者が徐々に減って行き、毎年の開催が危ぶまれるようになった。遠藤さんが、「依田が始めた夏期ゼミを俺は一人ででもやる」といった時、彼の師への思いを強く感じたものである。その後は、会場を京都文化博物館に移し、現在まで続けることができています。

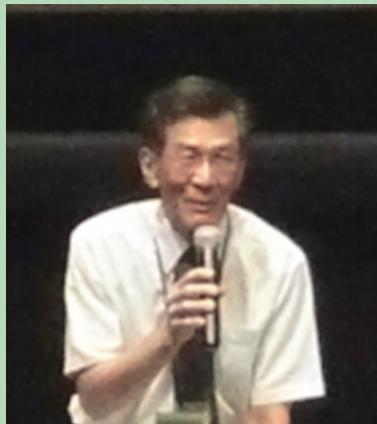
夏期ゼミでは、毎回シンポジウムを行うのであるが、そのパネリストの招聘は彼がほとんど連絡を取り、映画の現場に関わる人、研究者、評論家が招かれた。私は上映作品のプログラムを決めればよかった。遠藤さんのいない今年の「京マチ子特集」のパネリスト選びは頭がいたいた。

気配りの人、遠藤賢治ゆえに内に籠るストレスも少なくなかったに違いない。周りにそのような雰囲気を感じさせなかった。真面目な話をしている最中にそっと冗談を入れる。すぐに気づかないような冗談である。そのような茶目っ気もあって、周りを和ませてくれた。

関西支部の事務局を大橋勝氏とともに切り盛りし、夏期ゼミ、幹事会、研究会を動かしてくれた。これから、まだまだ一緒にやりたいことがたくさんあり、関西支部を盛り上げていかなければならぬ時に大きな穴が開いたようで、遠藤賢治の早すぎる死は悔しくてならない。

遠藤さん、ありがとうございました。安らかにお休みください。

(とよはらまさとも/大阪芸術大学名誉教授)



第 37 回夏期映画ゼミナールシンポジウム「依田義賢 人とシナリオ」(2015年)での司会



第 40 回夏期映画ゼミナール「京都・世界の宮川一夫」(2018年/写真右)での司会



第 41 回夏期映画ゼミナール、「大谷巖特集—音の世界—」(2019年/写真右)での司会

機関誌編集委員会

古賀 太

現在、第104号の編集作業中です。2018年秋から発足した現編集委員会が担当するのは、この号が最後となります。今回は26本という多くの投稿（論文24本、研究報告2本）があつて査読と審査が大変でしたが、これだけ多くの投稿があつたということは、学会誌として望ましい方向に向かつていないのではないかと思います。

投稿の形としては、現編集委員会になってから従来の印字原稿 4 部と CD-R の郵送を、102号から PDF 添付のメール投稿に変えました。さらに 103号からは、印刷・発送を含む編集作業全体を（株）国際文献社に委託し、同社の電子システムを使ったWEB上での投稿及び査読の形を取りました。急な新しいシステムの導入で投稿者にも査読者にも若干の混乱はありましたが、みなさまがたのご協力によっておおむね順調に運んだと思います。とりあえず、事務局の負担が大幅に軽減されたことは間違いありません。編集委員会としての事務的な作業も軽減されました。また、投稿者や査読者への連絡も以前より迅速になったはずで

す。また内容的にも、102号からは巻頭にテーマを設けたエッセーのページを作りました。最近の投稿論文は若手を中心ですが、こちらはどちらかと言えばベテランに自由に書いていただく形になりました。

104号の編集作業は現在まだ進行中ですが、7月中にはみなさまのお手元にとどくことになる予定です。今年には大会が延期となったので、これらの「改革」が会員のみなさまにどのような評価を受けているかを直接お聞きする機会はありませんが、少しでもよくなった部分は今後も引き継いでいただけたら幸いです。

今回の採択を決める編集委員会は、昨今のコロナ禍で集まるのが難しかったために、Zoomを使ってのオンライン会議を4月19日（日）に実施しました。東京、名古屋、京都、ニューヨークの理事・編集委員 7 人全員が参加し、通常より短い時間で終えることができました。旅費もかからないので、このオンライン会議も引き継いでいいのではないかと思います。

この場を借りまして、4冊を担当した現編集委員のみなさまとそれ以外で快く査読をご担当いただいた方々、そしてエッセーの執筆や書評を引き受けていただいた方々、そして何より刺激的な原稿を投稿いただいた会員のみなさまに深くお礼を申し上げます。

（こがふとし／機関誌編集委員長、日本大学芸術学部）

ビデオアート研究会

瀧 健太郎

<報告>



第22回ビデオアート研究会（2月29日）

内容：「インターディシプリナリーアートにおける映像表現の拡張」

日時：2020年2月29日（土）14:00 - 16:30

会場：レンタルスペースBlueMountain（池袋）

パネリスト：韓 成南（インターディシプリナリー・アート・フェスティバル・トウキョウ / IAFT 代表）

進行：瀧 健太郎（ビデオアートセンター東京 / 会員）

今回は演劇、ライブ、インスタレーション、公共空間での実演など脱ジャンルの作品紹介を行うインターディシプリナリー・アート・フェスティバル・トウキョウ（IAFT）の代表、韓 成南さんを迎え、作品を紹介しながら、横断的なビデオアートの動向と現在性について話を伺った。2009年に関西で前身となる活動を開始し、2014年から東京ではじまった同フェスティバルは、表現ジャンルが細分化している文化状況に対し、領域横断をキーワードに、既成ジャンルに属さないが故に発表の機会に乏しいアーティストを集め、異種混合の展示や共同制作の場の提供をしている。国内では東京・名古屋・大阪・神戸のほか、韓国、台湾、シンガポール、マレーシアなど東アジア諸国やアルゼンチン、イギリス、北アイルランド、デンマークなどにも赴き、同様の活動を行う海外のインディペンデント・グループとの交換プログラムを実施。

その活動の中で韓さん自身もアーティストとして参加しており、演劇的なライブ・パフォーマンスの中に、カメラやモニタなどビデオ・システムを介在させ、中継と記録の二つの異なる要素が演劇的身体を挑発し、攪乱させるような試みを続ける。

同フェスティバルでは、ほとんどの作品がフィルム、ビデオ、PC、ネットワークを利用しながらも、商業的で技術優先的な映像の在り方を批判的に捉え、「見る」というビデオの普遍的な命題を野心的に取り入れている特徴がみられた。また参加アーティストが、美術館やギャラリーなどの既成の発表の場ではなく、新たな観客の開拓や鑑賞の質的な変化を模索する主催者のアクティビティに賛同し、その新規性を打ち出し、既成ジャンルを刷新する手段としてビデオの特異性を用いたことも興味深い。こうした実験的な活動の中から、既成概念に依存しない柔軟な発想の表現思想の生成を期待させつつ、1960年代後半のインターメディアの精神を受け継ぐような、映像メディアの不定形な特性を改めて確認することとなった。

IAFTはこの3月にも都内での活動を行っており、将来的に活動は続けられ

アナログメディア研究会

水由 章、太田 曜

るという。詳細は公式サイト(<http://i-a-f-t.net/>)にて掲載されている。



今後の計画について

本研究会はビデオアートのアカデミックな研究と、制作や展示現場のフィールドワークを交互に行なう方針で発足されました。今後も定期的にビデオアートを学術的に研究する試みと、制作や展示現場を現地調査する形で研究会を進めたいと考えております。研究内容は随時、参加メンバー内で話し合いを行います。

taki.kentarou@ebony.plala.or.jp *ビデオアート研究会はメーリングリストで研究会の情報や資料などを共有しております。研究会参加ご希望の方は、(瀧)までご一報ください。

(たきけんたろう/ビデオアート研究会代表、
NPO法人ビデオアートセンター東京)

日本映像学会 アナログメディア研究会 映像講座

実験映画のフィルムアーカイブを考える

現在(いま)のデジタル配信の時代に、8mm、16mm フィルムでつくられた実験映画を、どのように後の世代に残していくべきか! 過去の代表作をみるために我々は何をしていくべきか!

映画の保存業務を実践する とちぎあきらさんに、映画復元の事例からフィルムメーカーに役立つ、映画のアーカイブの重要性についてお話しいただきます。他にアナログメディア研究会のメンバー南俊輔による、8mmの4Kテレシネの実践について、研究発表を行います。

講師
とちぎあきら (フィルムアーキivist)

研究発表
「アーティストによるテレシネの実践」
南俊輔 (美術作家/日本映像学会アナログメディア研究会)

日時 : 2020年1月25日(土) 19:00
資料代: 500円
会場 : 小金井 宮地楽器ホール 地下 練習室2・3
(JR中央線 武蔵小金井駅南口1分)
主催 : 日本映像学会 アナログメディア研究会
(e-mail: analogmedia2013@gmail.com)

とちぎあきら (フィルムアーキivist)
2003年より15年間東京国立近代美術館フィルムセンター研究員として、映画フィルムの収集・保存、アクセス対応などに従事。現在、IMAGICA Lab.からの業務受託など、フリーの立場で映画保存の仕事に携わっている。

南俊輔 (美術作家)
1985年北海道生まれ。映像機材の機構や映写技師による映写の行程など、映画周辺の環境に着目し、インスタレーションの制作やパフォーマンスを行う。近年は自作テレシネ機器を用いたフィルム=デジタル映画を制作。

2020.1.25

アーカイブを考える

「実験映画のフィルムアーカイブを考える」

2020年1月25日(土) 19-21時

資料代: 500円

会場: 小金井 宮地楽器ホール 練習室2・3

主催: 日本映像学会 アナログメディア研究会

現在(いま)のデジタル配信の時代に、8mm、16mm フィルムでつくられた実験映画を、どのように後の世代に残していくべきか! 過去の代表作をみるために我々は何をしていくべきか!

前半では映画の保存業務を実践する とちぎあきら氏に、映画復元の事例からフィルムメーカーに役立つ、映画のアーカイブの重要性についての講演を、後半ではアナログメディア研究会のメンバー南俊輔による、8mmの4Kテレシネの実践についての研究発表をおこなった。

講演: とちぎあきら(フィルムアーキivist)

「実験映画作家とアーキivist、ラボ・エンジニアによる協働の基盤を作るために」

フィルムアーカイブの定義について、以下の5つのテーマに分けて細かく説明があった。

- ・フィルムアーカイブとは、モノを保管する活動を意味するだけではない。
- ・フィルムアーカイブとは、組織や機関を表すだけの言葉ではない。
- ・フィルムアーカイブがモノを保管するとは、倉庫に格納することを意味するだけではない。
- ・フィルムアーカイブとは、デジタル化を意味するだけではない。

・フィルムアーカイブ活動は、フィルムアーカイブ機関だけがやるものではない。

国立映画アーカイブ(旧 東京国立近代美術館フィルムセンター)での事例を参考に、フィルムプロセスによる成果物とフィルムアーカイブによる保存と上映素材の作成方法や、フィルムのデジタル化(修復・グレーディング)のワークフローなどの実践的な提示を経て、

最後に、実験映画作家として、自身の作品のメディアや素材の保存や活用を検討するために考えること・やるべきこととして、以下の点を提案いただいた。

- ・そもそも何をやりたいのか
- ・やりたいことは、アーカイブ活動なのか
- ・自分でできること/できないこと は何か
- ・誰に相談/誰と協働 したいのか

実験映画のアーカイブ活動は、データベース化も含めて、現状ではほとんど実践されてはいない段階である。後の世代につなげていくためにも、フィルムメーカー自身がやることとの再確認と、外部との協働の重要性を認識する良い機会となった。

とちぎあきら

2003年より15年間東京国立近代美術館フィルムセンター研究員として、映画フィルムの収集・保存、アクセス対応などに従事。現在、IMAGICA Lab. からの業務受託など、フリーの立場で映画保存の仕事に携わっている。



とちぎあきら氏による講演

南俊輔(美術作家/日本映像学会 アナログメディア研究会)

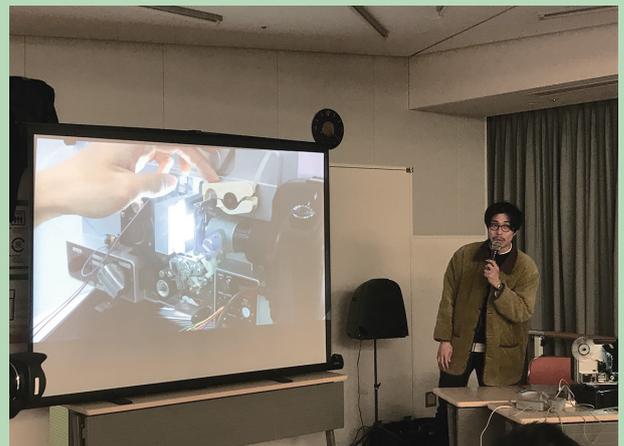
研究発表:「アーティストによるテレシネの実践」

自作のテレシネ機器(8mm・16mm、9.5mm) 製作コスト、メンテナンス費用と、ポストプロ作業(1コマ単位の撮影・JPEGへの書き出し、編集ソフトによる動画の書き出し)の事例を、テレシネ機器の動作動画とポストプロ作業動画とともに発表をおこなった。

民生用の機器をベースに、ハンドメイドで低価格かつ高画質のテレシネ機器をオリジナルで開発し、フィルム作品の動画データ化実践している事例としては、フィルム=デジタルのハイブリットな創作活動として大いに評価できる研究発表だった。



自作のテレシネ機器の解説をする南俊輔



南俊輔

1985年北海道生まれ。映像機材の機構や映写技師 による映写の行程など、映画周辺の環境に着目し、インスタレーションの制作やパフォーマンスを行う。近年は自作テレシネ機器を用いたフィルム = デジタル映画を制作。

文責:水由 章(みずよし あきら/アナログメディア研究会共同代表、ミストラルジャパン)

耕す (16/color/9min.)
 大地からの展開 (16/color/12min.)
 犬の映画 (16/color/8min.)
 幕代丸 (16/B&W/9min.)

商業現像所では出来るような写真で繊細な仕上がりを目指す能登勝の自家現像と自家プリント。自家現像なんてマズイ、マズイ、ムラムラで汚い、と考えて居る人はとりあえず能登勝の映画を一度見て頂きたい。自家現像が美しい映像を作り出す為の技法なのだ、と諒解出来るだろう。そして商業現像所では決して引き受けてはくれない“電子レンジ現像”“蟻プリント”“定着液吹き付け”など自家現像、自家プリントならではの驚愕の表現に息を呑む筈だ。多摩芸術学園映画科の学生時代にスタン・ブラッケージの作品に出会い劇映画から実験映画に方向を転換、以来自家現像、自家プリントでの実験映画制作一筋四十余年、世界でも類を見ない斯界のバイオニア能登勝。驚天動地の能登勝映画作品を作家の解説と共に鑑賞する。自家現像とは何かを考えるのにも絶好のこの機会をお見逃しなく。

『驚天動地のNOTO FILM』 能登勝 レクチャー & 上映

2020年2月11日 火曜日 (休日)

18時45分 開場
 19時00分 上映開始
 21時30分頃 終了予定

会場：小金井宮地楽器ホール 地下練習室2・3
 (JR中央線 武蔵小金井駅南口1分)
<https://koganei-civic-center.jp/map/>

主催：日本映像学会 アナログメディア研究会
 (e-mail: analogmedia2013@gmail.com)

資料代：1000円

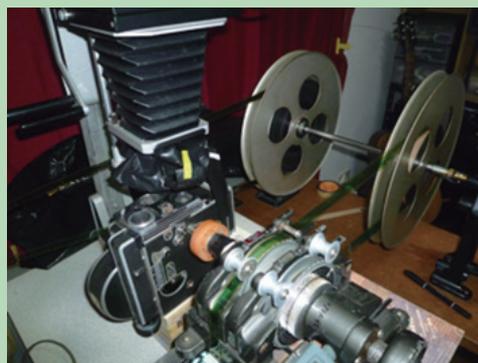
プログラム (上映予定作品) 作品の技法や技術の解説をして、作品を16mmフィルム映写機で上映します。

上弦の月 (16/color/16min.)
 下弦の月 (16/color/23min.)
 地 (16/color/7min.)



枠現像

普段8ミリなどの自家現像を行なっている参加者も多く来場していたようだった。ただ、8ミリなどで主に行われている自家現像とはあまりにもその技術がかけ離れている為具体的な質問などが余り出なかった。



プリント
(焼き付け)
装置

上映された作品とそこで使われた技術など

■無題八

1988制作 (16mm/B&W/9min.10sec.)

- ・モニターを光源にして撮影しながらプリントする。
- ・映写機を使い、ネガを直接カメラ内のポジに映写焼付けする。
- ・現像60%で水洗して吊るし、ストロボで露光。これでフィルムに付着している水滴も結露される。
- ・シンクロナイザーでループ状にしたネガをプリントする。

『驚天動地の NOTO FILM』

2020年2月11日 (火) 19-22時

資料代：1000円

会場：小金井 宮地楽器ホール 練習室2・3

主催：日本映像学会 アナログメディア研究会

映画フィルムの自家現像で日本を代表する作家の一人能登勝が作品について解説し、その作品を上映する。自家現像、自家プリントで制作された40年に及ぶ作品の軌跡の一端が映像を交えた自身による詳細な説明と共に鑑賞された。日本でも8ミリを中心に映画フィルムの自家現像は一定の広がりを持って行われている。そこには8ミリフィルムで撮影しても、現像所が限られていることが関係している。能登勝は商業現像所が国内に多く稼働していた時代から自分で現像・プリントする道を選んでいる。それは、今回紹介された例えば電子レンジ現像、定着液吹き付け、などといった商業現像所では引き受けてくれない特殊な技術が使われているからだ。

■耕す

1996制作(16mm/color/9min.20sec.)★

- ・プリントしたポジフィルムに現像前に部分的にセロテープを貼りカラー現像する。テープを剥がして再びモノクロ用の現像液で現像する。
- ・卵ケース一個分のところに水を入れそれをレンズ代わりにし、ネガとポジを二枚掛けしたカメラで、太陽に向けて水の乱反射でプリントする。

■光・しずく

1998年制作(16mm/color/11min.8sec.)

■水からの展開

1993制作(16mm/color/10min.15sec.)

- ・水流を三原色フィルターで撮影する。
- ・水流を三原色フィルターでコマをずらしてプリントする。
- ・シンクロナイザーでネガを二枚重ねて一緒にプリントする。
- ・映写機にネガを掛けレンズを付けないカメラのレンズ窓に直接映写しながらプリントする。更にはカメラのレンズ窓をクレラップで被い、プリントしながらそこに水を噴霧する。クレラップを密着させないで少し浮かし、勿体ないがビールを噴霧すると効果が上がった。

■夢のフランス

2009年制作(16mm/color/6min.)

- ・夢のフランスのプリントは基本ボーダレスで左右にはズレないように映写機のプレッシャープレートを通す。巻き取りのコアの大きさに上に流れるのか下に流れるのかを調節。小さいコアにフィルムを巻いて3ミリ厚くする。これを生側。大コアにネガ。ネガには3フィート生には2.5フィートのリーダー。
- ・両方のスピードが違い過ぎると完全に流れてしまい、激しくなると何か分からなくなる。このエスカレータープリントでテキストがどうなるかもテストした。
- ・ネガとポジ重ねてをカメラに入れて部屋を暗室にする。カメラのシャッターが開いた状態にしてペンライトの光をレンズに向けて光の線を結像させた。画面では黒い線となっている。
- ・ビデオをフィルムでキネコ撮影してネガを作りそれをプリント。

■夢代八

2014年制作(16mm/color/9min.30sec.)

- ・ソーダレンズ。プリント時にソーダの気泡を結像させる。ピントがレンズ内側に来るように調節している。ソーダレンズには絞りが無いのでF500ネガでも4倍のND4枚を使用し更にシャッター開角度を少し閉めて光量を調節する。
- ・生フィルムに露光して先に色をつける(ペイント)。この作品ではレッドとグリーンでブルーに色を付けている。
- ・発色現像液は、ヘキサメタリン酸ナトリウム(硬水軟化剤)、CD2(発色現像主薬)、炭酸ナトリウム(アルカリとして添加)、硫酸ナトリウム(軟化膨潤を抑制)、プロムカリ(かぶり防止)を混ぜて捨てる。最後のプロムカリ加えない溶液で現像し、わざとかぶらせるた。

■下弦の月

2006年制作(16mm/color/23min.)

- ・レンズを取ったカメラの窓に直接物体を置くと物体とフィルムは直接接する事になる。そこで光を当てながらシャッターを押すと物体の影が結像される。その物体は、虫、タンポポ、丸い物、フィルムの断片、ギターの弦など。
- ・蟻をフィルムに直接結像させながらレンズを使用して風景も撮影。蟻の天地はフィルム面が大地となり画面では下から見上げてる事になる。

■上弦の月

2009年制作(16mm/color/16min.)

- ・現像時、ネガに現像液を噴霧する。現像を進行させる為に3日くらい置く場合もある。
- ・ボーダレスプリント。映写機動力で巻き取りを動かし、空いている両手で光とフィルムの重なり具合をコントロール。フリクションリワインダーで巻き取っている。
- ・コマ撮りは普通空間的な面白さとか時間的な面白さを狙いとして使う技術。今回のコマ撮りは合わせ写真を目的として撮影したもの。それをたまたま映写機で見たらこれまでのコマ撮りとは随分違った面白さがあった。同じ場所で四季を通じて撮影したものをプリント時に構成している。

■夢代九

2001年制作(16mm/B&W/9min.)

- ・モノクロのプリントポジフィルム(7302)を撮影で使用して反転現像する。
- ・D-95処方液(現像)+漂白+太陽光での反転露光(エマルジョンもベースも色が変わるまで)+FD-31処方(第2現像)+停止+F-125処方
- ・7302をエマルジョン面でプリントしそのフィルムをベース面で撮影(ASA5)する。その反転現像。
- ・シンクロナイザーで上からの光でプリントする。光源を映写レンズとアイリスレンズを組み合わせたもので小さく絞り込む。フィルムの横幅で4つに分割できる。
- ・レンズを取ったカメラでの密着プリント。ボールペンのペン先を出す小さな穴から発光してピンポイントプリントする。光を当てる場所はビュワーで見ると同じ位置で合う。

■夢寐(むび)

2019年制作(16mm/color/11min.20sec.)

- ・プリントフィルムを反転現像しての制作が困難となったのでそれに代わる方法を考える。
- ・3383をネガで使用する場合光量がある時には48Bのフィルターを使用する。ネガの時点で現像前に定着液を噴霧する。
- ・プリントしてからも定着液を噴霧する。噴霧する噴霧器の種類や噴霧角度、あるいは定着液の温度、水洗までの時間、液の疲労の具合など色々な条件で行ってみる。
- ・プリントはY50フィルターを基本とする

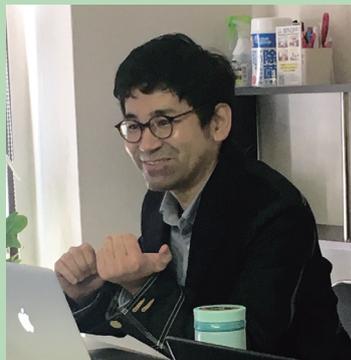
ショートフィルム研究会

林 緑子、森下 豊美

ショートフィルム研究会 2019年度 活動報告

2019年度に実施した2件の講演会について活動報告を行う。

第27回 アイドルMVのメディア論



作品の解説をする能登勝

文責：太田 曜（おおたよう／アナログメディア研究会代表、東京造形大学）



参加費無料

登壇者 塚田修一、張瑋容 司会 洞ヶ瀬真人

内容 発表2件、ディスカッション

日時 2020年2月1日(土)開場14:00/開演14:30/終了17:45

会場 名古屋市中村区則武1-13-9 チサンマンション第3名古屋ビル
1106号室

協力 梶川瑛里(広報イラスト制作・運営)

主催 日本映像学会ショートフィルム研究会

日本映像学会研究活動助成金対象研究

第27回研究会では、現代のアイドル文化で重要なアイドルMV(ミュージック・ビデオ)を主題に、塚田修一氏と張瑋容氏の研究発表と来場者とのディスカッションを行った。

塚田氏は、数々の作品を例に、国内の女性アイドルMVの1980年代から現在までの歴史をメディア論の観点から考察した。広告や映像産業の方針など周辺のメディア環境との関わりで、次のような変化の流れが見られるという指摘は重要である。

まず1980年代は、アイドルのCMタイアップソングがPV的な機能を持つ「PVの時代」だった。続く1990年代は、「PVからMVへの過渡期」、2000年代前半は、商業主義的な意図が後退し、MVがクリエイターの実験的表現が可能な場となる「MVの時代」となった。さらに2010年代前後には、アイドルMVは、楽曲の歌詞世界から自律し、いわば「ショートフィルム化」していく。張氏は、2000年代以降のジャニーズアイドルのMVについて、ジェンダー学の観点から考察した。その中性的な男性性とメンバー同士のホモソーシャルな関係性が、女性ファンの欲望と関連して形成されている様相を次のように示した。

ジャニーズアイドルの男性性は、戦後のマッチョ主義とは正反対の優しい中性的なイメージであり、ファンと共に成長する「卒業」がないアイドルとして、親子に渡る多様な年齢のファンを生んでいる。K-popアイドルや、日本のEXILEなどの他グループと比較すると、撮影方法や女性キャラクターの存在、身体性の見せ方などで様々な特徴が見られる。これらは、女性ファンの大きな楽しみの一つである男性アイドルのグループメンバー同士のホモソーシャルな関係性の観察と消費に貢献している。男同士の友愛的絆を強調しホモソーシャルな世界を覗き見させる構図や、女性キャラクターを排除することにより、女性ファンに疑似恋愛感情や母性本能への刺激を与える演出等は、ジャニーズアイドル特有の男性性の美学を生み出している。

本会は、両氏の充実した発表により、国内のアイドルMVの変遷と特徴が理解できる内容となった。参加者からも多くの声が寄せられ、議論のなかでは日韓のMVの違いに見られる産業構造やアメリカからの文化的影響による差も見えてきた。

文責：林 緑子 (はやしみどりこ/ショートフィルム研究会代表、シアターカフェディレクター)

第28回 アニメーション研究を牽引してきた功労者 渡辺泰 ～その研究活動と功績～展を振り返って



参加無料

登壇者 森下豊美、佐野明子

内容 発表2件、上映、質疑応答

上映作品 『マー坊の落下傘部隊』(1943年、12分) 製作：佐藤次郎

演出：千葉洋路

日時 2020年2月15日(土)開場/14:30開演15:00-終了17:00予定

会場 名古屋市中区則武1-13-9 チサンマンション第3名古屋ビル1106号室

協力 渡辺泰、安井喜雄(神戸映画資料館館長)

企画 森下豊美、佐野明子

主催 日本映像学会ショートフィルム研究会

日本映像学会研究活動助成金対象研究

来たる2020年2月15日『「アニメーション研究を牽引してきた功労者 渡辺泰 ～その研究活動と功績～」展を振り返って』がショートフィルム研究会主催で行われた。本報告会では、2018年に京都で開催されたアニメーション史研究者・渡辺泰氏を顕彰した展覧会の企画者である森下豊美および佐野明子によって、展示で使用された氏の戦中戦後のアニメーション関連資料コレクションの検証が行われた。

森下豊美からは展覧会の企画概要とともに『「戦後、国内最初期のアニメーション愛好家たちの活動について」～渡辺泰を中心に』と言うテーマの下、渡辺泰展資料から戦後発足したディズニー・ファンクラブ会員向け会誌およびその会員たちによる同人誌を中心に、戦後最初期の国内アニメーション愛好家たちの活動の一端と、渡辺氏のアニメーション研究者としての足跡が検証された。

また佐野明子からは『渡辺泰コレクションによる「日本のアニメーションの戦時下・戦後」』と言うテーマで氏のディズニーコレクションから、『白雪姫』ほかディズニー長編が、いかに日本のアニメーションや映像文化に影響を与えたか、渡辺泰コレクション資料を手がかりに考察された。

また京都の展覧会では紙資料として紹介された『マー坊の落下傘部隊』(1943年、佐藤次郎、千葉洋路)の映像上映も行なわれ、戦時下の国内アニメーションの一端も検証された。

本報告において、渡辺泰コレクションの歴史的な位置付けと、戦後国内アニメーション受容研究の重要性が検討された。

文責：森下 豊美 (もりした とよみ/ショートフィルム研究会、名古屋学芸大学メディア造形学部映像メディア専攻)

ドキュメンタリードラマ研究会

杉田このみ

下記の通り、第5回ドキュメンタリードラマ研究会を開催した。
 二部構成とし、第一部はテレビマンユニオンの今野勉氏を囲んだ座談会、第二部は、テレビ東京プロデューサーの田淵俊彦会員が関わったドラマ『ハラスメントゲーム』（2018年、テレビ東京）の上映と、講演を行った
 司会：丸山友美会員。

<テーマ>

テレビ制作者から聞く「ドキュメンタリーとドラマ」のあいだ
 テレビ東京「ハラスメントゲーム」プロデューサー田淵俊彦会員

<概要>

日時 2020年2月24日(月・祝) 11時～17時予定
 会場 専修大学 神田キャンパス 7号館3階 731教室
 参加費無料。

<報告>

新型コロナウイルスの感染拡大が一層深刻になっていくなか、中止も検討したが、10名ほどの参加者数の見込みがあったので、消毒液を用意し、手洗いうがいを参加者に呼びかけ、こまめな換気、席を空けて着席してもらうなどできる最大の対応をして開催した。

第一部では、テレビマンユニオンの今野勉氏を囲んだ座談会。これまで何度か招聘して講演いただいたが、テーマを絞らず、いま考えていること、感じていることを語り合いたいと思い開催した。まず、今野氏の著書『宮沢賢治の真実 修羅を生きた詩人』（2017年、新潮社）の第15回蓮如賞受賞、また、テレビ番組『映像詩 宮沢賢治 銀河への旅～慟哭の愛と祈り』（2019年、NHKBS4K、Eテレ）の演出や、長年のテレビへの貢献が称えられ、2020年、第61回毎日芸術賞特別賞を受賞されたこと、またテレビマンユニオン創業50周年などに対し、研究会から祝意を述べた。

そして、今野氏から、最近感じたことなど、自由にお話いただいた。主なお話は、宮沢賢治に関する本とテレビ番組を制作した経緯などが語られた。

今野氏：蓮如賞の審査員が錚々たるメンバーで驚いた。その一人である梅原猛さんの「賢治の真実の姿に涙が出た」との選評があり、そんな感情的なことを文章に書く方ではないのでまた驚いた。妹とし子の悲恋を知り、そのことを悲しみ詩に託した兄の姿、今まで知られてこなかった兄妹の無念な思いを伝えることができた。

番組の方では、詩「春と修羅」の朗読を鬼剣舞に合わせたところが印象的なシーンとなった。「春と修羅」は賢治の代表作だが、奇妙な詩でもある。これを映像化するって何だろうと。ふと鬼剣舞を一人で踊ってもらったらどうか、と考えた。郷土芸能に意味をかぶせると、詩が生生きとしてくる感じがあった。ずっとドキュメンタリードラマといわれる番組を作ってきたけど、こういう経験は初めてだった。

これは、映像編集によって可能となる表現だ。これはドキュメンタリーなのかドラマなのか、それには当てはまらない。

研究会としては、4K設備のある会場を手配し、3時間バージョンの上映と講演会を開催したいと考えている。

第二部では、『ハラスメントゲーム』第1話の上映後、田淵氏による講演を行なった。

田淵氏は「ノンフィクション性の高いドラマにおける表現の配慮」を研究テーマに挙げており、これまでに『破獄』（2017年、テレビ東京）、『二つの祖国』（2019年、同放送）など、数多くのドラマをプロデュースしている。

本作は、現代の社会問題であるさまざまな「ハラスメント」を主題とし、リアリティを追求しながらも、エンターテインメントドラマとして高い評価を得ている。

田淵氏：テレビ局は「激動の時代」へと突入している。地上波→BS→配信の三位一体で「売れるコンテンツ」ではないと、企画が通らない。これまでドラマは、費用対効果が低いコンテンツで、赤字で、局のイメージや品揃えとして作っていた。しかし『きのう何食べた?』（2019年、テレビ東京）は、配信が驚異的に伸び、2次利用も含めて大きな黒字が出た。ドラマが配信によって、黒字を出すことができるコンテンツとして示し、まさに下克上の時代。

しかし、そうなると、表現に多様性がなくなってくる。ステレオタイプ化が起りやすい。勧善懲悪や分かりやすいもの、命を喚起させるものが好ましいといわれる。

こういったテレビ業界の変化について分析し、また制作者としての実感や体験を含めて、『ハラスメントゲーム』の企画から実際の制作について、脚本家とプロデューサーのやりとりも含め、細かく語ってくれた。そしてドラマとドキュメンタリーの違い、リアルとリアリティに言及し、「この表現は誰かを傷つけていないか」という視点で取り組んできたこと、「現状を打破する可能性を示すことがドラマの役割だ」と考えていることを語った。

参加者からも積極的に質問があり、視聴者との関係性の変化、映像人類学との接点、ドラマでのジェンダーの描かれ方についてなど、今後の研究会にとっても興味深い内容が議論された。

新型コロナウイルスの状況が一日も早く収束し、また熱く議論を交わす研究会を開催したいと願っている。

(すぎたこのみ/ドキュメンタリードラマ研究会代表、専修大学)

メディアアート研究会

関口 敦仁

「メディアアート研究会」2019 年度活動報告します。

2019 年度メディアアート研究会展示参加

「Philosophy of Drawing」ARS Electronica Festival 2019 Campus Program Post-City Linz Austria

2019 年 9 月 6 日から 9 日までオーストリアのリンツで開催された、ARS Electronica festival 2019 において、愛知県立芸術大学が Campus Exhibition に招待され、過去のメディアアート研究会の出品者を中心に企画展示した。参加した作品は DTG- 大泉和文 + 加藤良将「DM 1.0」、山本努武「Resolution of landscape」、小鷹研理「Body-ject oriented」、鈴木浩之 + 大木真人「The constellation of Daichi-Takahagi」、関口敦仁 + 片岡勲人「Arm Existence2019」ほか。



「Arm Existence2019」と会場風景



「DM 1.0」と会場風景

2019 年度メディアアート研究会企画展示

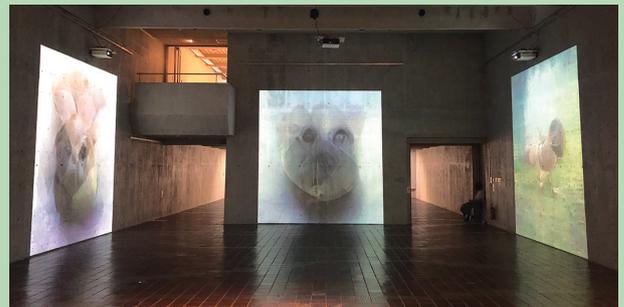
「芸術創造する装置」展

2019 年 9 月 21 日から 10 月 6 日まで愛知県立芸術大学芸術資料館において開催した。

概要：装置性の高い作品から生み出される芸術性について、改めて問うような作品群の展示。作品表現に伴う、芸術的記号から現代の社会的な問題や潜在的な事象を想起させる、あるいはアフォードする機能を鑑賞者に体験させ、芸術が創造されるプロセスを示そうとする作品展示を行った。

展示作家／作品として、真鍋大度（ライゾマティクス）ゲスト + 神谷之康氏（京都大学情報学研究所教授）ゲスト / 「dissonant imaginary」2019、外山貴彦（名古屋造形大学） / 「ころがる、ころがる、ひろがる」

2011/2019、DTG 大泉和文（中京大学工学部）+ 加藤良将（名古屋芸術大学）/ 「DM 1.0」2019、山本努武（名古屋学芸大学）+ 飛谷謙介（関西大学）ゲスト / 「CL_PORT_00-02」2019、関口敦仁（美術家、愛知県立芸術大学美術学部教授） / 「Arm Existence/Coupling」2019 などが展示された。



「dissonant imaginary」2019

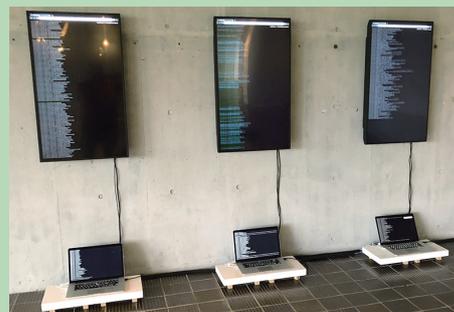
「CL_PORT_00-02」2019

2018 年度メディアアート研究会 / 芸術講座

「人工知能と映像表現の現在」

愛知県立芸術大学芸術資料館演習室において 2019 年 10 月 6 日（日）開催。発表者：関口 敦仁

ARS electronica2019 やウィーンビエンナーレでの AI を中心とした新しい表現やその手法を活用した映像表現を分析的に紹介し、発表を行なった。



2020 度は研究会企画の展示会を一回と会期中に研究会を一回予定しています。

予定日時：2020 年 9 月 19 日 - 10 月 4 日

展示テーマ：「生命と時間の表現」

場所：愛知県立芸術大学芸術資料館。

展示予定：長谷川愛（バイオアーティスト / ゲスト）、伏木啓（名古屋学芸大学）、村上泰介（愛知淑徳大学）ほか

・全国大会開催日未定のため、変更になる場合があります。

（せきぐちあつひと / メディアアート研究会代表、愛知県立芸術大学）

アジア映画研究会

石坂 健治

◎第2期第14回(通算第33回)例会

日時:2020年2月4日(火)18時~20時

会場:国際交流基金・外苑前オフィス7階アジアセンター

座長:金子遊(多摩美術大学、本学会員)

内容:

発表「ボーダークロッシングアジア—国境を越えるインディペンデント映画製作を再考する」

発表者:馬然(マ・ラン)(名古屋大学、本学会員)90分+討議

2019年11月にアムステルダム大学出版より、英語の著書『Independent Filmmaking across Borders in Contemporary Asia』が刊行された発表者がその著書で扱ったテーマを英語で発表しました。

発表者は「トランスナショナル・シネマ」という概念を批判的に解釈しながら、むしろ昨今のアジアにおけるインディペンデント映画は「トランスローカル」(ローカルからローカルへ)の流れになっていると語ります。そのなかで作られた映画に対して、移動性、アイデンティティ、主観性といったキーワードに触れ、新しい映画の作家性をどのように考察するのかという問題提起がありました。具体的には、『靖国』『選挙に出たい』を撮った李纒(リ・イン)、『キムチを売る女』など朝鮮族の視点から撮り続ける張律(チャン・リュル)、『サウダーヂ』など空族らの作品に触れながら、映画製作・興行・流通におけるインディペンデントな形態を模索する映像作家像を論じる、非常にスリリングな発表となりました。(金子)

(いしざかけんじ/アジア映画研究会代表、日本映画大学)

中部支部

前田 真二郎

<報告>

中部支部では、2019年12月21日に、第2回研究会を椋山女学園大学にて開催した。1件の招待講演、2件の研究発表については質疑応答も活発で充実した内容となった。

研究会開始前に128教室にて第2回幹事会を開催した。第3回研究会の開催についての調整を行ない、会費未払いの会員についての情報共有も行った。

第3回研究会は、3月10日に名古屋学芸大にて開催を準備していた。2件の研究発表とともに、例年通り8大学が参加する学生作品プレゼンテーションを予定していたが、新型コロナウイルス拡大防止を考慮し開催は中止となった。

(2月26日に中部支部HP及びメーリングリストにて周知)

<第2回研究会概要>

2019年度 | 日本映像学会 中部支部 | 第2回研究会

日時:2019年12月21日(土)13時30分より

会場:椋山女学園大学(星が丘キャンパス)

文化情報学部メディア棟128教室

(〒464-8662 名古屋市千種区星が丘元町17番3号)

◎研究会スケジュール

13:00 - 第2回研究会 受付開始

13:30 - 開会あいさつ

13:35 - 14:35 研究発表(2件)

休憩

14:50 - 15:50 招待講演(1件)

15:50 - 16:20 ディスカッション

16:20 - 閉会あいさつ

(終了後 懇親会)

◎招待講演

人類学実践ツールとしての映像制作—関係の記録を例として

南出 和余氏

要旨:

ふるくはマリノフスキーの頃から人類学者たちは、フィールドワークの中で「イメージ」を記録するために、写真や映像を活用してきた。「厚い記述」によって人類学者の立ち位置や関係性が注視される以前に、映像人類学ではすでにルーシュによって「カメラの人格化」が提示されていた。カメラ(と撮影者)がそこに在ること(撮影すること)がその場に影響を及ぼし、時にカメラの前の人々をトランス状態にする。カメラが収める「真実」とはそうした撮影者と被写体の共犯関係によって作られたものであるとされる。

本報告者は、2000年からバングラデシュの農村でカメラを持ってフィールドワークを継続してきた。当初の調査対象は「子ども」であったが、同じ対象を追い続けているうちに彼ら彼女らは「子ども」ではなくなった。最初、カメラは子どもたちと私の間の「遊び道具」であったが、彼らに変化するに連れて、私の撮影に対する彼らの態度もカメラの存在も変わっていった。また、子

もの頃から撮り貯めてきた映像は彼ら彼女らの記録となり、私と彼らとの関係の変化を示し、時折一緒に見返すことで、互いの再帰的解釈を生み出す。本報告では、1人の少女＝女性と私の記録映像を事例に紹介しながら、自己と他者、過去と現在が交差するところに導かれるイメージ理解、それを助ける映像実践について考えてみたい。

南出 和余(みなみで かずよ)氏 プロフィール

1975年生まれ。現在、神戸女学院大学文学部英文学専攻准教授。
神戸女学院大学大学院人間科学研究科(修士)、総合研究大学院大学文化科学研究科(民博)(博士)。専門は、文化人類学、映像人類学。
著書に、『メディアの内と外を読み解く—大学におけるメディア教育実践—』(南出和余、木島由晶編著、せりか書房、2018年)、『「学校化」に向かう南アジア—教育と社会変容—』(押川文子、南出和余編著、昭和堂、2016年)、『「子ども域」の人類学—バングラデシュ農村社会の子どもたち—』(南出和余、昭和堂、2014年)、『フィールドワークと映像実践—研究のためのビデオ撮影入門—』(南出和余、秋谷直矩、ハーベスト社、2013年)等。映像作品にXX Parnu International Documentary and Anthropology Film Festival Award for Best Scientific Documentary 「Circumcision in Transition (割礼の変容)」(2006年、36分)等がある。

◎研究発表(2件)

サークルとしてのアニメーション文化—1960～1980年代の日本を中心に

林 緑子 会員(シアターカフェ 運営)

名古屋大学人文学研究科博士課程前期課程

要旨:

従来の日本のアニメーション研究は商業アニメと著名作家の短編作品の分析が中心であり、アニメーションのファン文化研究では商業アニメのファンとしてのオタクの分析が中心だった。だが、オタクという呼称の成立以前の1960年代後半から、国内外で制作された様々なアニメーションを好むファンの動向が国内で起き、国内各地にアニメーションサークルが発足している。彼ら・彼女らは受容・上映・制作の側面における活動を通じて、商業アニメとも関連しながら、オタクとは異なる文脈で日本のアニメーション文化を支えてきた。この事実はこれまでの研究史からは見過ごされている。

本発表では、アニメーションサークルの特徴を明らかにした上で、この活動を日本のアニメーション研究とファン文化研究の文脈に位置付ける。これにより従来の研究とは異なる観点から、アニメーション文化史の研究に貢献したい。

意味の発掘としての「取材」—事物への意味付けの変化を提示する作品とその制作プロセスについて

片山 一葉 会員(美術作家)

愛知学泉大学、愛知淑徳大学、大同大学、名古屋大学、非常勤講師
／愛知県立芸術大学教育研究指導員

要旨:

近年、作品の設置される環境にまつわる情報から展開されるサイトスペシフィックな芸術作品は、国際美術展や各地のアートプロジェクトの広がりとともに、確立された表現の一種となった。そのような作品は、何らかの形でその場所に関する情報を収集し編集することで成立するが、私の制作活動においても、ある場所または人物について取材を行い、そこで得たモノ・映像・言葉といった素材をもとにインスタレーションを構成することにより、日常の中で意識されることなく存在の意味が失われつつある事物を採り上げ見つめ直すことを目的としている。また、上記の制作における方法論を用いて、ギャラリーや美術館のイベントとして、日常生活とは違った事物の観察手法を体験するワークショップも行っている。

本発表では、「取材(そしてその結果の提示)」という行為による、事物への視点や意味付けの変化を「意味の発掘」として捉えることを試みながら、今までに制作した作品・実施したワークショップの事例を報告する。

以上

(まえだしんじろう／中部支部担当常任理事、情報科学芸術大学院大学)

西部支部

黒岩 俊哉、西谷 郁

＜プッチェボン・アルーンペン短編作品展＞

西部支部では、2019年9月7日(土)、タイを代表する映像作家プッチェボン・アルーンペンの上映会を開催しました。プッチェボン氏は初の長編作品となる『Manta Ray』(2018)で、ヴェネチア国際映画祭のオリゾンティ賞を受賞し、アジアでもっとも注目を浴びている映画監督のひとりです。また、福岡アジア美術館のアーティストインレジデンス事業にて、2007年から約一年半の間福岡に滞在し短編作品を制作したことから、福岡との縁が生まれました。

今回は、氏の福岡滞時に制作された『A Suspended Moment』(2009)と、『Manta Ray』の起点ともいえる短編作品『Ferris Wheel 観覧車』(2016)を、福岡中洲大洋映画劇場メディアホールにて上映いたしました。

「プッチェボン・アルーンペン短編作品展」

日時：2019年9月7日(土)13:00～17:00

場所：福岡中洲大洋映画劇場 6階 メディアホール

主催：日本映像学会西部支部

協力：福岡アジア美術館、福岡インディペンデント映画祭

入場料：無料



上映は、大きく二部にわけて構成しましたが、一部では一般と会員を含め約60名、二部では約70名の参加がありました。中洲大洋劇場のメディアホールは、普段は関係者の試写などに使用する小規模のホールであるため、一部二部共に客席がほぼ満席の状態でした。二部の上映後には、西部支部の伊藤高志、黒岩俊哉、西谷郁会員らが、『A Suspended Moment』主演の舞踏家原田伸雄氏の体験談を起点に、上映作品の分析と討議を行いました。

原田氏は撮影時を振り返りながら、プッチェボン氏が撮影を重ねていく中で作家性を日々高めていく様子を語りました。たとえば氏にはクランクイン直

前に父を亡くすという出来事がありましたが、気丈な姿を保ちながら、むしろそこから寺山修司の死生観に傾倒して去っていく映像作家の強烈な姿を紹介しました。伊藤会員は、台詞が少なく映像美を探究するプッチェボンの作家性を高く評価しながら、一方で物語には難解な点も多いため、機会があれば本人とそれらを確認したい、そして伊藤会員が制作準備中の新作にも共感する点やインスパイアが多くあったと語りました。黒岩会員は実験性の高い演出に注目しながら、デビッド・リンチ作品にみられる暗示的かつ比喩的な登場人物の役割と比較し氏の作品の分析を行いました。西谷会員は『A Suspended Moment』のプロデューサーとしての立場から、脚本に縛られず、撮影現場でアドリブで撮影を展開していく氏の様子を解説しました。会場には同作の参加スタッフや出演者が多く訪れ、タイのアート系作品が福岡の若いクリエイターとの協力と友情によって作品が完成されたことが、あらためて再認識されました。今回の上映会や討議を通じて、タイの代表的なアートハウス系の作家について体系的に研究する機会を得たことを喜ばしく感じています。

追記となりますが、後日、アジアフォーカス福岡国際映画祭に参加したプッチェボン氏は、上映後のQ & Aにて、映像作家としてのキャリアが福岡から始まり、福岡アジア美術館や日本財団の助成が大きな助けになったと謝意を述べています。またその際に、会員を含めたスタッフ・キャストらが『A Suspended Moment』をサポートした「アートスペース 貌」(福岡市)にて、氏をかきみながら再度議論を重ねたことを添えておきます。

(にしたに かおる／西部支部、西南学院大学)

＜研究例会および支部総会＞

2020年2月12日(水)、九州産業大学芸術学部17号館6階デジタルラボ601にて、研究例会および「2019年度支部総会」を開催いたしました。研究例会では3件の研究発表が行われ、参加した会員のさまざまな専門分野から、活発な意見交換が行われました。

その後、2019年度の支部総会を開き、ここでは議題4件について討議の結果了承されました。

＜概要＞

日時：2020年2月12日(水) 15:00-18:00

会場：九州産業大学芸術学部17号館6階デジタルラボ601

●研究例会(研究発表3件)：15:00-17:00

「アイソタイプ・アニメーションと同時代の情報アニメーションへのその影響—フィリップ・ラーガンを中心として」

伊原 久裕 会員 (九州大学芸術工学研究院)

要旨：

情報アニメーション(インフォアニメーション(Inform animation))とは、Nicoló Ceccarelli, Carlo Turriらが提唱した概念で、ダイヤグラムや地図、グラフなどを用いて情報を伝えることを目的としたアニメーションの1ジャンルを示す。このジャンルの典型のひとつにピクトグラムを用いた技法であるアイソタイプのアニメーションがある。アイソタイプのアニメーションは、第二次世界大戦中のイギリスで、ドキュメンタリー作家のポール・ローサの

ディレクションによって制作されたが、同時期のカナダにおいてもアイソタイプにきわめて類似したアニメーションがNFB (National Film Boards) から配給されていたことはあまり知られていない。制作者はフィリップ・ラーガン (Philip Ragan : 1909-1989) という名のアメリカ人であり、彼はNFBの責任者であった英国人ドキュメンタリー作家のジョン・グリアソン に依頼を受けて、およそ30本の短編アニメーションをNFBのために制作していた。発表者は、アイソタイプの影響に関する研究の一環として、この無名のアニメーション制作者について調査を行っており、本発表では、現時点で判明している調査の報告を中心として、同時期のアメリカで軍事訓練用に制作されたUPA (United Productions of America) 関連のアニメーションも取り上げつつ、アイソタイプ・アニメーションの影響の範囲、形態とその社会文化的意味について考案したい。



伊原 久裕 会員による研究発表

「実験映像『桜の心臓』について—考察と展開」

黒岩 俊哉 会員 (九州産業大学芸術学部)

要旨：

『桜の心臓』は、発表者が2019年に制作した実験映像作品である。発表者のこれまでの作品の特徴は、合成技術から生まれる映像群(イメージ)を契機として、さらにそれらを再合成することで、重層的かつ複雑なイメージのまとまり(シーケンス)を構成し、映像表現の深度や強度を形成していくものであった。ところが本作では、歌手"よしお"の同名曲のプロモーション機能を備えることが前提として存在していた。そのため初期段階の制作アプローチが、これまでの表現のそれとは幾つかの点で異なっていた。それは、歌手や曲の世界感、ある種の抽象的な映像言語を用いて表現する必要性が、当初から規定されていたことでもある。今回の発表では、発表者のこれまでの作品と本作との表現の違いを解説し、それを同時に問題提起としながら、映像芸術と映像がもつ機能性について、作家の立場から考察する。また、本作はこれまでに「黒岩俊哉映像個展『まなざしのパッセージ2019』」(2019年9月)と「三又中学校学校美術館」(2019年12月)において公開されている。映像と観客が接する「場」の重要性と、作品の自律性についても言及する。

「香椎宮境内でのビデオプロジェクションを活用した空間演出について」

岩田 敦之 会員 (九州産業大学芸術学部)

要旨：

2019年9月、福岡市香椎宮で開催された観月祭にてビデオプロジェクション手法による空間演出を行った。神社での夜間イベントに合わせた演出が課題となり、幅広い世代の来場者が境内でのひと時をゆったりと過ごせるよう、自然の「ゆらぎ」や「うつろい」をテーマに空間演出を行った。本発表では、

この活動の総括を行うとともに、今後の展開について報告する。



岩田 敦之 会員による研究発表

●支部総会：17:10-18:30

(1)2019年度活動報告

総会：1回、研究例会：1回、上映会およびディスカッション：1回と、その内容を確認した。

(2)2019年度収支報告

2019年度収支報告が了承された。

(3)2020年度活動計画

支部総会：1回、研究例会：2回、上映会：1回、幹事会：3回とする。

(4)その他

以上

(くろいわとしや／西部支部担当常任理事、九州産業大学)

編集後記

総務委員会

コロナ・ウィルスの感染拡大により、5月30・31日、関西大学で開催予定の第46回大会が延期となりました。4月7日には、政府による緊急事態宣言が発出され、首都圏や関西圏の大学が軒並み休校を余儀なくされている状況を鑑みれば、この措置もやむなきものご理解いただけるものと信じております。現在、9月開催を目指して、関西大学の大会実行委員会とも調整を進めておりますが、社会情勢を睨みながらの対応を迫られることになります。

大会の延期に伴いまして、2019年度決算、2020年度予算及び事業計画、そして次期会長の選出などをご審議・ご承認いただく通常総会も、例年のように開催することができなくなりました。日本映像学会会則第17条では、「通常総会は毎会計年度終了後3ヶ月以内に開催する」と定めてあります。集団感染の予防の観点から、イベントの自粛要請が続く中、会員の皆様にご参集していただく訳にもいきませんので、異例ではありますが、郵送でのご審議・ご承認の準備をしています。総会の成立要件は、委任状を含めて、3分の1以上の出席となっておりますので、必ずご返信いただくようお願いいたします。

今号を持ちまして、今期の総務委員会の担当は終了となります。総務委員会へ初めての参加ながら、総務委員長の高責を担うこととなり、手探りで何とかゴールに辿り着いた気分です。会報にご寄稿いただいた会員の皆様、ご支援いただいた総務委員の皆様、そして新旧の学会事務担当者（三浦さんと清水さん）に篤く御礼申し上げます。

(にしむら やすひろ／総務委員長・東京工芸大学)